末黒野
昭和二十八年十月八日第三種郵便物認可（毎月一回発行）
平成二十一年十一月五日発行　第六十四巻第十一号
（通巻七五九号）

末黒野（すぐろの）

11月号
（通巻759号）

蟬時雨

小川玉泉

百枚の青田の果ての宮の杜

鷺一羽二羽三羽四羽青田中

産土の杜を育てて夏落葉

蟬声を日がな一日句を閲す

鳴き止みし時の清しや油蟬

夕蟬やこころに懸かかること忘れ

粲々と夕焼を落とし洗堰

島陰の波やはらかし浮輪の子

足の爪染めし乙女の藍浴衣

満月へ雲脚遠し広島忌

長崎忌鉄砲百合の咲き初めし

朝風を入れ蜩に耳澄ます

冷ややかに

松本三千夫

秋蝶の己が影置く石の上
牧水の酔ひたる野比の浜薄暑
尼寺や色なき風の音持たず
らくだ往く後をくぢらが秋の雲
礁噛む浪衰へず秋の虹
秋蝶の寄りては離れ風化仏
猿蛙石屋の石の冷やかに
艦橋へ秋の北斗の柄の触れぬ
秋の風鈴己が意に沿ふ風集め
露草や瑠璃を深めて朝の湖
舗装路を裂き車前草の花上げて
緋のカンナ基地の港の見ゆる駅

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

籐椅子

清海信子

白樺に夜の翳ふかき夏炉かな
避暑の宿一夜水音を近くせり
自転車を磨く親子や雲の峰
少年のまなざし青嶺志す
白玉や気丈と言はれては泣けず
草深く晩夏の蝶の睦みをり
堂裏の崖に張りつき草刈女
籐椅子や水平線は一碧に
瀬のひかり岩に動げり日の盛り
蜩や風のまにまに鳴きふえて

土用太郎

黒滝志麻子

ががんぼや山雨のたたく坊泊り
土用太郎声けだるげに山鴉
水筒の残りを捨てぬ草いきれ
夕風になほも田の面の炎ゆるかな
くつろぎて涼しき夜の童話集
真夜中の月下美人の吐息かな
万緑にふかぶか沈み天狗寺
風鈴の風を呼びこむ駅舎かな
引く波の夕日を返す実玫瑰
羅漢みな大き耳もちつくつくし

乙矢集

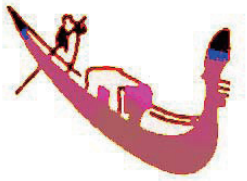
配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

ふるさと　吉田きみえ

草刈られ木々の匂ひの杣の道
川の字に寝てふるさとの短かき夜
遠郭公入り日の沼の水の襞
思ふほど引けず朝の草むしり
夏霧や入江の白き繋ぎ舟
幾山を越え来て求む甲斐の桃
道路鏡傾ぎ青田の別れ道

夜の秋　安斎久英

梅雨蝶の消ゆる蒼古の洞窟に
日食の期待外れや戻り梅雨
黒揚羽日照雨に息を整ふる
川上に背なをあづけて夕河鹿
暮れなづむ湖心を去らず通し鴨
露天湯におとがひ沈め夜の秋
杣が家の軒を余さず唐辛子



選後に

小川玉泉

十月号で慎んで告示したように、甘田正翠名誉主宰が九月十五日逝去された。末黒野のために献身的に尽くされ、残された多大の功績に心から御礼申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げたい。

今月は暑さのせいか、意味不明の句が多かった。①「初生りの苦瓜島の料理真似」②「力抜くことも難儀や百日紅」③「炎天や観光馬車の声掛り」④「雲海は雲の波立つ天の海」⑤「滴りや苔の青さと囁きと」⑥「暗闇を人の気配とまがふ蟬」⑦「朝よさを芭蕉の詠みし島涼し」⑧「屁理屈の尽き果て末の昼寝かな」⑨「立秋の声もうつろに聞く暑さ」⑩「追憶を秋の始まる蓼科へ」の十句。

①の初生りの苦瓜までは収穫の喜びを表現して判る。しかし、島の料理真似では島がどこの島なのか、島のどのような料理なのか、読者には判らない。②の力抜くことも難儀の力抜くが、体のどの部位の力を抜くのか、不明である。「力まずに生くるは難儀百日紅」とすれば無理をせずに生きる意味になる。③の観光馬車の声掛りは不明。馬車に乗りませんかと勧められたのであろう。それなら「観光馬車を勧められ」とすればよい。④の「雲海は雲の波立つ天の海」の「は」は「の」とし、雲海を見下ろしている作者の位置を示さないと「天の海」では雲海と重複する。例えば「雲海といふも波立ち奥穂高」とすることも。⑤の「滴りや苔の青さ」まではよいが、「囁きと」が不明である。「滴りの育む苔の青さかな」と、囁きを除いては。⑥の「暗闇を人の気配とまがふ蟬」がいるのであろうか。闇の中では滅多に蟬は鳴かない。⑦の「朝よさを芭蕉の詠みし島涼し」の島の名前が判らない。よほど芭蕉の研究をした人でないと、この句は判らないであろう。芭蕉の作品は「朝よさを誰松しまの片心（三冊子）」である。⑧の「屁理屈の尽き果て末の昼寝かな」は「尽き果て」で切れるので、「かな」止めは控えた方が良い。かなを使うなら「屁理屈の尽きたる末の昼寝かな」とすれば良い。⑨の「立秋の声もうつろ」は立秋を擬人化しており、作者が耳で空ろに聞いたとなり不可。「立秋の風をうつろに昼寝覚む」とすれば良い。⑩の「追憶を秋の始まる蓼科へ」では作者の詠みたいことが判らない。「追憶や蓼科の秋始まりぬ」とすれば意味が通る。俳句は詩であるが、飛躍が過ぎると、難解な作品になってしまう。選評に移る。

炎昼の路地何ひとつ動かざる　今泉あさ子

灼けつくような真夏の太陽光が降り注ぎ風のない路地。じっとしているだけで汗が滲んでくる真昼。今日はなんと暑いんだろうと思いながら、路地を見渡すと、そよぐ物は何一つない。終戦の玉音を聞いた真昼を思い出した。

手のひらにたてたてよこと冷奴　河合　とき

現代の冷蔵庫の性能をフルに活かした夏一番のご馳走の冷奴。よく冷えた半丁の豆腐を掌にのせ、何ともいえない冷たさに涼しさを感じながら、包丁を入れる様子を、縦たて横と克明に詠んだのである。作者の仕草が見えてくる。

前をゆく日傘の揺れに歩を合はす　熊切　修

一読男性の句と判る。前を歩いている身形の淑やかな夫人が日傘、それも今流行の黒日傘をさして、ゆっくり歩いている。作者は美しい容貌を思い描きながら、追い越すことをせず、どこまでもついていったのである。諧味の句。

杖なしに踏み出す一歩夏燕　山崎　稔子

いままで杖を頼りに歩いていた作者は、思い切って手術をされた。リハビリの間も心配で杖なしでは歩けなかったが今日は思い切って杖なしで燕が飛び交う道へ、一歩を踏み出されたのである。杖なしで歩けた喜びが伝わる。

土ぼこり匂ひ残暑の通り雨　浅川　幸代

俳句は「いま、ここ、われ」を詠むものの見本のような句。未だ強い日差しの残る日である。夕立が来て、乾いた土を勢いよく跳ね上げた。その瞬間ムッとした土埃の臭いが鼻を突いたのである。その瞬間を捉えて妙。

売り切れし農協野菜朝ぐもり　加藤　静江

熱帯夜の続く毎日。暑さを思わせる朝曇りの中、涼しい内にと散歩に出た。途中の農協野菜直売所で新鮮で安い野菜を手に入れようと立ち寄った所、今朝は千客万来。目当ての野菜は売り切れていてがっかりと。季語が働く。

ふるさとは捨田捨畑雲の峰　鍋島　武彦

各地にひろがっている農業離れをまざまざと見せる句。久し振りに帰った故郷。そこには、耕作を見放された田や畑が荒れるがままに、草を茂らせている。夏雲の逞しさに比べて何と佗しい現実。唖然とする作者が見える。

売り尽くしセールの目玉扇風機　和田　慈子

暑い夏もあと一月。家電販売店では秋から冬ものの販売へ向けて、商品の入れ替えを始める。夏物売りつくしセールである。見ると扇風機が半額以下に。余りの安さについ手が出そうになったが、思いとどまる作者が見える。（以下略）

青炎集

小川玉泉選

横浜　今泉あさ子

風鈴や娘売子の声清し
会釈して過ぐる少女や花芙蓉
夕風や摘む青紫蘇の香ばしりぬ
風呼んで蓮葉波立つ源氏池
母の忌や蓮の盛りの檀那寺
炎昼の路地何ひとつ動かざる

横浜　河合とき

沖晴れて鳶の高舞ふ土用あい
北国の空の重さよ花うつぎ
雲切れて来し隠沼の未草
百日紅の白きがこぼれ武家屋敷
手のひらにたてたてよこと冷奴
サルトルとカフカを読まず胡瓜もむ

横浜　熊切　修

葉から葉へ蠅取蜘蛛の忍者めく
葉擦れにも驚き易き夏の蝶
前をゆく日傘の揺れに歩を合はす
葉脈のあらはに天道虫だまし
汗の眼に日食の影捉へけり
大西日リユックの列の遠ざかり

横浜　山崎稔子

杖なしに踏み出す一歩夏燕
初蟬の雨間を鳴き声一つ
夫の見する初朝顔の写真かな
夏帽子稚には少し大きすぎ
光芒を過るタンカー夏の朝
雲昏き水平線や灯の涼し

耕土集

松本三千夫選

幼きは幼きねがひ星祭　横浜　栃木　志津

切るまでが勝負の西瓜大きかり

どっかりと上り框の西瓜かな

朝ぐもり地へ入る電車人詰めて

立秋の空へゆるりと観覧車

夏川の岩を蹴上ぐるしぶきかな　木村　弓子

せせらぎに暮るる山里鮎の宿

色褪せし父の日記や蛍の夜

大空をひとり占めして大夕焼

やはらかき土の匂ひや木下闇

草の根を洗ふ出水の速さかな　新井八重子

涼風の走る古民家広座敷

風鈴のちりんと相撲取り直し

叱咤飛ぶ夏合宿や貸ふとん

滝道の音に飛沫の気配かな

山城を仰ぎ待たるる鵜飼舟　中島ひろし

神鈴の錆音山の涼を呼ぶ

無為ひと日風と遊べる夏座敷

原爆忌水豊かなる星にゐて

存分に生きて仰ぎぬ天の川

木洩れ日の空蟬包む静寂かな　本田　耕造

飛石に水打つ女将京ことば

竿灯の高きロビーや国際線

世を拗ぬる如く片蔭ひろひけり

一輪を活け洗顔の今朝の秋